学校だより

令和8年度小川中学校
令和8年9月18日発行
NO. 5
文責:岡宮 隆吉

～未来へ響かせよう　私たちの『小川讃歌』～　校長講話から（９月１４日）

１ 歌碑と、語り継がれてきた歌

突然ですが、皆さんは毎朝、登校するときに昇降口の前を通りますね。そこに、黒い大きな碑があるのを知っていますか。そう、「小川讃歌」の歌詞が刻まれた歌碑です。実は、皆さんが普段なにげなく目にしているあの歌碑は、今から40年以上も前に、昭和53年の小川中学校の生徒たちが声を上げ建てたものです。昭和の小川中生は、村の山に入ってフキを採り、夏休みには薬草を集めました。何キロも山菜を集めて、それを市場に卸し、その資金で学校に必要なものを購入していました。昭和53年には、「自分たちの愛するこの歌を、形にして残したい」と資金を集め、この歌碑を建てたのです。





「小川讃歌」は、かつてこの小川中学校で、生徒会歌としてずっと大切に歌い継がれてきました。小川中学校の出身の皆さんの保護者の方々や、地域のおじいちゃん、おばあちゃん、40 代から 70 代の方々に聞いてみてください。「小川讃歌、知っている?」と。きっと「知っているよ!」「校歌と同じくらい、いや、それ以上に心に残っているよ」と、笑顔で答えてくれるはずです。地域の方々にとっても、この歌はふるさと小川村の象徴であり、大切な宝物なのです。しかし、残念ながら、数年前、コロナ禍によって、学校全体で声を合わせて歌う機会が途絶えてしまいました。少なくとも、以前私が小川中学校にいた7年前、この小川讃歌は生徒会の前や、生徒総会の前に皆で歌っていました。最近、「もう一度、あの小川讃歌を中学生に歌ってほしい」「また生徒たちと一緒に、あの歌を歌いたい」今、地域の方々や、本校の卒業生である保護者の皆さんから、そんな熱い思いや声がことあるごとに学校に届いています。今日は、開校 70 周年という大きな節目を迎えるにあたり、なぜこの「小川讃歌」がこれほどまでに地域の人々の心を揺さぶるのか、そしてなぜ今、皆さんに歌ってほしいのか、この歌に秘められた「ドラマ」と「願い」についてお話しします。

２ 「小川讃歌」の誕生ドラマ:倉田校長先生と奥村教頭先生

今から半世紀以上前、昭和 40 年代の小川村は、過疎化が進み人口が減っていく時代でした。村の人々の中には「どうせ、うちの村なんて…」と諦めたり、村を去っていったりする人も少なくありませんでした。そんな時代に、第 4 代校長としてこの小川中学校に昭和 41 年に着任されたのが、倉田春木（くらたはるき）先生です。倉田先生は、亡くなられて 50 年以上が経った今でも、長野県の教育に大きな功績を残された素晴らしい先生として、深く尊敬されています。小川中に 4 年、その後、県教育委員会、そして、信州新町中学校の校長先生のときに、長野

県の校長会長の立場で、長崎県での会議に参加されておられる途中、59 歳の若さで突然亡くなられた校長先生です。そんな倉田校長先生が在職されていた 4 年間、倉田先生は、村の人や生徒たちの姿を見て、強く思っていたそうです。「小川村には豊かな自然がある。美しい歴史がある。そして、温かい心がある。人間を育てる素晴らしい条件がそろっているじゃないか。中学生たちに、自分たちの生まれ育ったこの小川村を絶対に卑下してほしくない。村の良さを誇りに思い、力強く生きてほしい」と。



当時は珍しくありませんでしたが、倉田先生は、車の運転免許をもっていなかったので、車に乗らず、毎週日曜日になると自分の足で村のあちこちを歩き回ったそうです。ある日、先生が、鬼無里へ通じる峠の大洞の池のほとりで、芝生に寝そべっておにぎりを食べていたとき、当時、頻繁に起こっていた「松代地震」の大きな揺れが襲いました。木々が波打ち、地面が揺れる中で、倉田先生は直感したそうです。「ああ、俺はいま、小川村と一緒に揺れている。小川とともに生きているんだ」と。そして、この体験から当時の先生方に「これが小川中学校教育における自然への開眼、勤労体験への志向などの発想の原点なんだ」と、お話になったそうです。そのことを記録に残してくれたのが、倉田校長先生が小川中学校 4 年目、昭和44年、本校に着任された奥村秀雄教頭先生です。この奥村先生も平成30年、今から8年前に亡くなられましたが、長野市の柳町中学校の校長先生を最後に退職され、その後、長野市の教育長を勤められ、倉田先生同様に、教育界では、リスペクトされています。昭和 53 年の生徒会誌「さわなり」に歌碑建立を記念の掲載があり、奥村先生が、倉田校長先生とのエピソードを寄稿されていました。一部を紹介します。



その年の九月ごろ、当時、生徒会の主任だった石曽根先生が、生徒たちが生徒会の歌が欲しいと希望しているということで、倉田先生にその作詞を依頼しました。先生は考えてみるというお返事をされ、それからというものは六ヵ月間というもの、じっと考え続けて居られたようでありますが、そのことについては一切口にはされませんでした。先生が小川を去られた翌日、四十五年の四月一日、先生を長野市宇木の県教職員住宅にお訪ねしたところ、



「教頭さん、こういうものをつくったが。これでいいかない。生徒会の歌になるかどうかみてくんねかなあ。そして、できたら教頭さんが曲をつけてくれればありがたいんだがない。」と言われて、見せていただいたのがこの詞でありました。お聞きすると、先生は小川を去られたその日に、今までの思いをその場で、一気に書き上げられたようでありました。

それが「小川讃歌」の歌詞です。初めて読ませていただいた私は、その感じとして、「生徒会の歌と言うよりは、むしろ小川とともに在った人が、その小川を讃え、小川に願いをこめた詞のように思うので、小川讃歌とされたらどうですが。」と申し上げたところ、先生は即座に、「それはいいない。そうしてくれや。」というご返事で、おこがましいと思いながらもその場で、この詞に「小川讃歌」と名づけさせていただいたのであります。それから二週間余りというもの、私はこの曲づくりに集中しました。それこそ夜中にふと眼を覚ましては、口ずさんでみるようなことも何

回かありました。詞が余りに荘厳であるが故に、何とか重く深いものにしたい、詞に小川への願いがこめられているが故に、小川村のどなたにも口ずさんでからのものにしたいなど、そんな思いに迫られたからであります。

奥村先生は「これは生徒だけでなく、村の人にとっても、ずっとふるさとへの誇りを持ち続けられる素晴らしい歌になると考え『小川讃歌』と名付けたことがよく分かります。奥村先生は、倉田校長先生の熱い思い、小川村への深い情熱に心を打たれ、覚悟を決め、朝早く学校へ行き、一人でピアノに向かいました。夜中にふと目を覚ましては口ずさみ、悩みに悩み抜いた悪戦苦闘の 1 ヶ月半。音楽の専門ではない奥村先生にとって、倉田先生の荘厳で深い詩にメロディをつける作業は、簡単なことではなかったと思います。そうしてついに完成したのが、この「小川讃歌」です。

3 歌詞に込められた小川村の風景と歴史

「小川讃歌」の歌詞には、1 番から 4 番まで、小川村の春夏秋冬と、歴史や名所が見事に描き込まれています。



1番（春）「武部小川の境内に生いて年ふる杉桂」

武部八幡宮（たけぶはちまんぐう）の大木に吹き渡る春風を感じながら、この村を開いてきた先人たちへの敬意を感じます。

2番（夏）「夏草茂る筏原修験の道を戦国の世に守りたる戸隠衆」

夏の筏原（いかだはら）や万人塚。戦国の時代、戸隠の忍びとして、命がけで一族の信仰や道を守り抜いた人々の歴史を歌っています。

3番（秋）「秋大洞に水は澄み三重の塔暮れゆけば」

秋の静かな大洞（おおどう）の池、そして高山寺の三重の塔は、小川の象徴、宝です。そして、今でこそロマン館、天文台とありますが、澄み渡る秋空に星が輝く大洞高原の風景は、私たちの心を静かに深く満たしてくれます。また、奥村先生は、この詞の三番「秋大洞に水は澄み三重の塔暮れゆけば」を曲づくりの核にしたそうです。奥村先生は、倉田先生の小川教育の原点、先生の小川における教育の発想が「大洞の池」にあったというお話が頭にやきついていたと記録に残っていました。

4番（冬）「千古の雪をいただきてあまそそりたつアルプスに眼をあげて真向かえば山またわれにほほえみり」

小川村から見る北アルプスの景色は、長野県一番、そして4番の終わりの歌詞、「山またわれにほほえみり」という言葉は、厳しい冬、ふと見上げた北アルプスの雄大な山々が、まるで自分たちに優しく微笑み返してくれるかのように感じられる。この校舎から見える北アルプスもまさにその通りです。「自然を愛し、誇りを持って呼びかければ、自然もまた自分たちに応えてくれる」という、人間の深い優しい心を表現していると思います。

歌詞には小川村の誇り高い歴史と美しい自然が見事に描き込まれています。

4 歌うことの意味と価値：君たちへ託すバトン



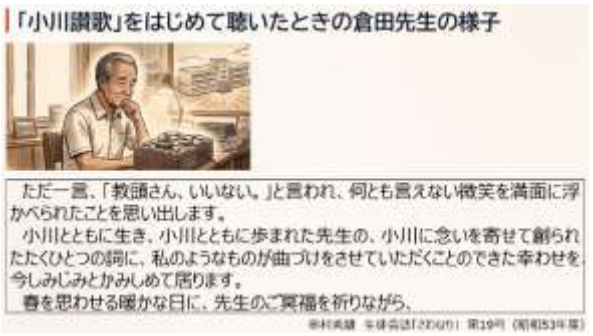
昭和 45 年に作られたこの曲のメロディは、正直に言うと、令和の時代を生きる皆さんにとっては、少し堅く感じたり、聞き慣れなかったりするかもしれません。ですが、皆さんに知ってほしいのです。この歌は、ただの「昔の歌」ではありません。今から 50 年以上の間、この小川村で、小川中学校で君たちと同じように学習をし、笑ったり、楽しんだり、ときには

悩んだり、生徒会活動や部活動に汗を流していた先輩たちへ、そして未来の小川中生、まさに今ここにいる皆さんへ向けた、「先人、大人たちからの真っ直ぐなメッセージ」だと思います。「どんなに少子化が進んでも、どんなに時代が変わっても、君たちが生まれ育ったこの小川村には、胸を張れる素晴らしい歴史と自然がある。だから自分自身に誇りを持って、力強く生きていきなさい」倉田先生や奥村先生、そして小川村の先人たちのそんな願いが、この歌詞とメロディの一音一音に込められています。皆さんがこの歌を歌うこと。まずは、多くの先輩たちの情熱を受け継ぐことです。そして、地域の人々が「もう一度聞きたい」と願っている思いに応え、学校と地域を歌声で一つに結びつけることです。開校 70 周年記念式典のオープニングで、私たちは地域の方々と共に、この「小川讃歌」を歌います。当日は、「小川讃歌」を大切にされている地域のアコギ会の皆さんの演奏、伴奏、そして吹奏楽部の代表の人のメロディ演奏で歌う予定です。

5 令和の「小川讃歌」を響かせよう

歴史は、過去から未来へ引き継がれるバトンです。コロナ禍で一度途切れてしまったそのバトンを、もう一度しっかりと受け取り、令和の新しい風に乗せて未来へ響かせる役目が、今、皆さんに託されています。ぜひ、歌うときは、今日話した、かつて山菜を採って売ったその資金で歌碑を建てた先輩たちや、倉田先生や奥村先生、小川を愛した二人の思いや、小川の歴史や美しい四季の風景を思い浮かべてみてください。

最後に、完成した「小川讃歌」、合唱クラブの生徒が歌った録音を、はじめて聴いたときの倉田先生の様子を奥村先生が次のように書き残しています。ただ一言、「教頭さん、いいない。」と言われ、何とも言えない微笑を満面に浮かべられたことを思い出します。小川とともに生き、小川とともに歩まれた先生の、小川に思いを寄せて創られたひとつの詞に、私のようなものが曲づけをさせていただくことのできた幸せを、今しみじみとかみしめて居ります。春を思わせる暖かな日に、先生のご冥福を祈りながら、開校 70 周年のその日、多くの人の歌声が体育館いっぱいに響き渡り、地域が一体となり、参加者全員が「いいない」と倉田先生と同じ思いを重ね合える日になることを楽しみにしています。みんなで心を一つにして、新しい『小川讃歌』の歴史を創っていきましょう。



新 ALT ルーシー先生をお迎えしました



本校で5年間ご指導いただいた ALT のサラ先生のご転出にともない、8月から新しい ALT のルーシー先生をお迎えしました。

英語の授業でこれからお世話になります。新しい ALT の先生と一緒に頑張っていきましょう!

・開校70周年記念式典 ＜10月2日（金） 13:30～＞
・第64回文化祭 ＜10月3日（土） 8:30～＞
ぜひ、小川中学校へお出かけください。



記念式典では、70周年にちなみ、「70」の人文字撮影を行います。保護者の方、来賓・地域の皆様方のご協力をお願いします（雨天時は撮影を中止します）。式典のオープニングでは、「小川讃歌」を歌います。体育館でみなさんの歌声を響かせましょう。

文化祭に向け、生徒もみんなで協力して頑張っています!!